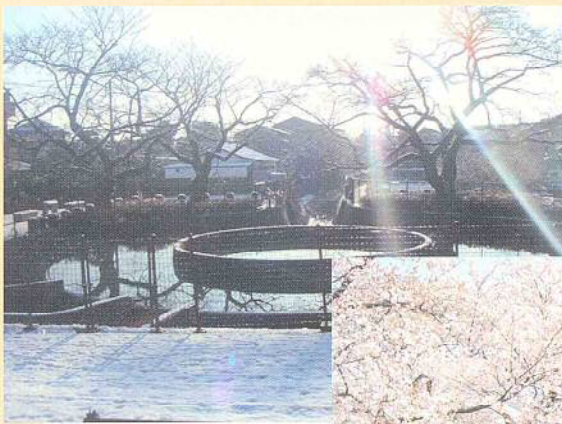


国登録有形文化財（建造物）



KAWASAKI CITY

水部分筒円地久水用領分二



川崎市

二ヶ領用水久地円筒分水

1. 所在河川 二ヶ領用水
2. 所在地 川崎市高津区久地1丁目34番地
3. 管理者 川崎市
4. 完成年度 昭和16年(1941)
5. 歴史的経緯

二ヶ領用水は、江戸時代、多摩川から上河原堰および宿河原堰の2ヶ所で取水されたのち、高津区久地で合流し、「久地分量樋」へ導かれ、そこで四つの堀(久地堀、六ヶ村堀、川崎堀、根方堀)に分水されていました。

この分量樋は、堰から溢れでる流れを、それぞれの灌漑面積に比例した樋(水門)によって分ける施設で、これにより、各堀(水路)ごとの水量比率を保とうとするものでしたが、この方法では、川の中央部は流れが速く流量も多くなり、それに比べ川岸に近い部分は流れも緩やかで流量も少ないという川の性質によって、なかなか正確な分水ができず、それぞれの水量をめぐり水争いが絶えませんでした。

そこで、昭和16年(1941)、多摩川右岸農業水利改良事務所長であった平賀栄治(1892～1982)は、平瀬川の改修に際して農業用水の正確な分水管理のできる分水装置として円筒分水の方式を採用し、平瀬川の下を潜り、再び吹き上がってきた水を円筒の円周比により、四つの堀に分水し、各堀へ用水を提供できるように造られたのが、『二ヶ領用水久地円筒分水』です。



平賀栄治の顕彰碑
(平成22年3月)

円筒分水の技術は、当時としては最も理想的かつ正確な自然分水方式の一つだったので、近年にいたるまで各地で造られています。戦後、視察に訪れた連合軍司令部の技師により、アメリカにも紹介されたと言われています。

円筒分水は、平成10年(1998)に川崎市で初めて国の登録有形文化財(建造物)に登録されました。

平成17年(2005)から高津区のイベントとして、市民活動団体・町会を中心に、毎年3月末に春の到来を招く「円筒分水スプリングフェスタ」が実施され、多くの市民が集い賑わっています。また、現在地域の方々によって、周辺環境整備・美化活動が進められています。

6. 構造等



水を抜いた円筒分水

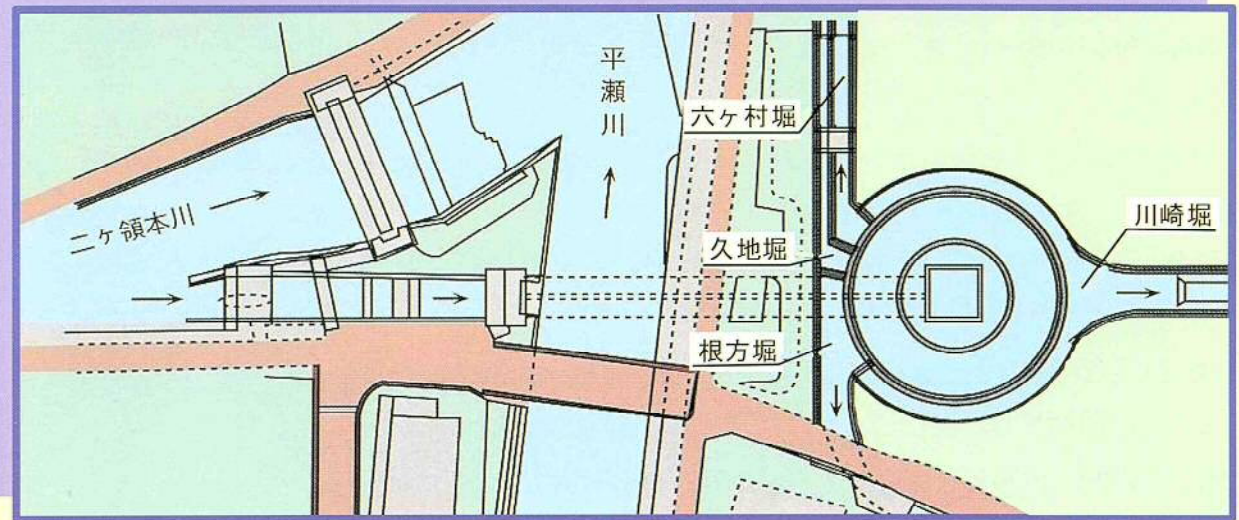
正確な自然分水を目的としたもので、2本のコンクリート管(内径1500mm)で平瀬川の下を潜ってきた水は、直径8mのコンクリート製の円筒から再び吹き上がり、その外にある直径16mの円筒の円周を、それぞれの灌漑面積に合せた比率(川崎堀38.471m、六ヶ村堀2.702m、久地堀1.675m、根方堀7.415m)で水量を分ける農業用水の施設です。

久地円筒分水

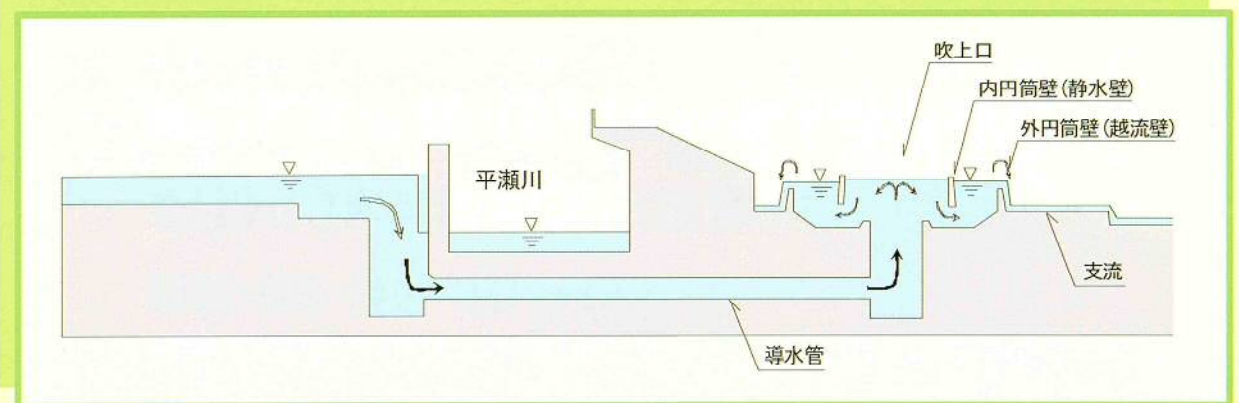
位置図



平面図



断面図



二ヶ領用水

二ヶ領用水の名は、江戸時代の川崎領と稲毛領にまたがって流れていたことに由来しており、この二ヶ領用水は、現在の川崎市のほぼ全域を流れる神奈川県下で最も古い人工用水のひとつであります。

昔の多摩川は、洪水を繰り返しては田畑を押し流す大変荒々しい川でした。江戸時代、この多摩川に接していたにもかかわらず川崎領と稲毛領の村々では、水利事情は不便で、水田工作による農業生産基盤が脆弱ぜいじやくでした。そのため、多摩川の水を利用するには、堤防を築き、必要な水量を引き入れる農業用水を建設する必要がありました。

慶長2(1597)年、徳川家康から治水と新田開発の命を受けた、当時の代官小泉次大夫(慶長6年就任)は、二ヶ領用水の建設に着手し、14年の歳月をかけて慶長16(1611)年に完成させました。

当時の記録によると、二ヶ領用水の完成により、米の収穫量が飛躍的に伸びたと伝えられています。

その後、百年余りを経た頃には、用水路はいたる所で欠損し、かなり荒廃した状況になりました。享保9(1724)年、当時川崎宿の名主・問屋および本陣役を勤めていた田中休愚は、幕府の命令を受けて、死に瀕していた二ヶ領用水を再び蘇よみがえらせる本格的な改修工事を行いました。

明治以降は、二ヶ領用水から取水する横浜水道が開設(明治6年)され、飲料水として利用したり、工場への工業用水などとして利用されてきました。

戦後、急速に進んだ都市化により農地は減少していますが、現在でも、本市の北部を中心とした地域で農業用水として、また、円筒分水より下流の地域においては環境用水として利用されています。

この二ヶ領用水は、現在の川崎市の発展の礎いしずえを築いたシンボルともいえる歴史のある河川であり、市民に愛され親しまれています。



台和橋小泉次大夫
レリーフ(多摩区)

川崎市建設緑政局道路河川整備部河川課

川崎市川崎区宮本町1番地

TEL 044-200-2906